



TITLE:

京大広報 No. 239

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 239. 京大広報 1982, 239: 261-268

ISSUE DATE:

1982-09-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209447>

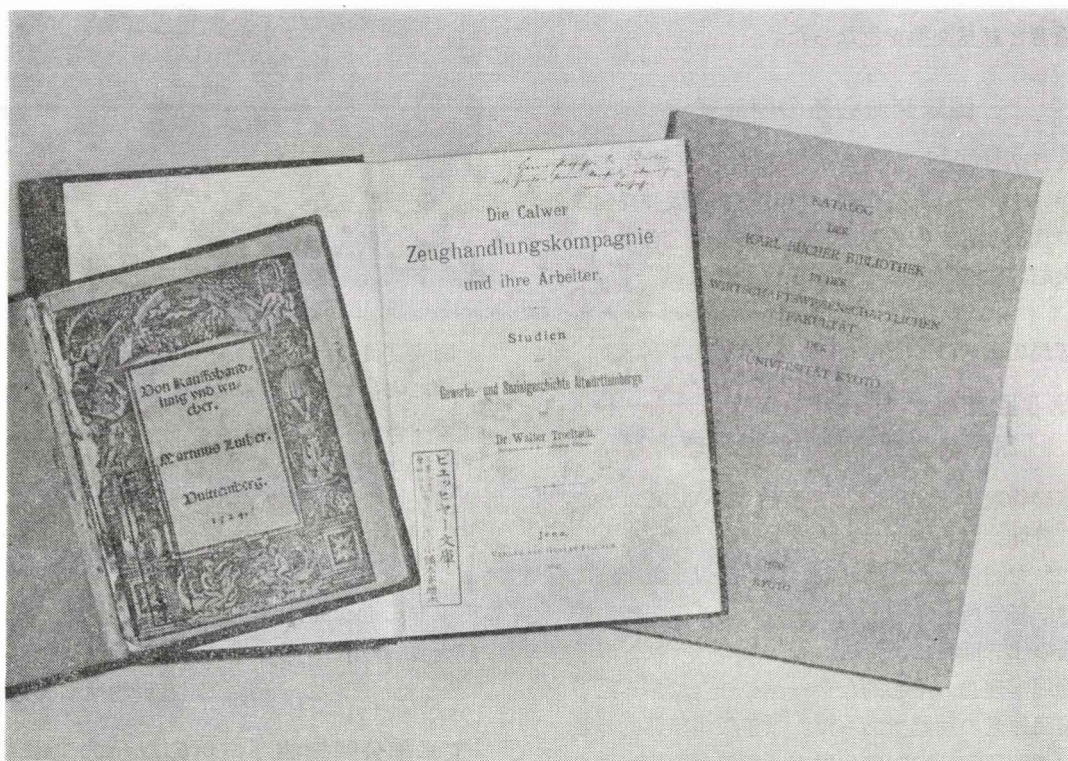
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 239

京都大学広報委員会



経済学部所蔵「ビューハー文庫」の一部 —関連記事本文266ページ—

## 目次

沢田総長、中華人民共和国の大学等を訪問……………	262
国際交流会館の開館式……………	262
第5回京都サマー・インスティテュート	
「原子核集団運動の微視的理論」……………	262
工学部公開講座「自然のなかの工学」……………	262
数学入門公開講座……………	263
公開講座「農業簿記・農業経営講習会」……………	263
人文科学研究所夏期公開講座……………	263
公開講座「高等学校教育関係者のための	
現代数学展望」……………	263

公開講座「木材の科学」……………	264
教養部構内発掘の梵鐘製造遺構……………	264
＜紹介＞	
経済学部の「ビューハー文庫」……………	266
討報……………	267
日誌……………	267
＜随想＞	
雍正硃批論旨研究班の思い出	
名誉教授 佐伯 富……………	268



## ＜大学の動き＞

# 沢田総長、中華人民共和国の 大学等を訪問

沢田敏男総長は、8月30日から中華人民共和国の高等教育・研究機関の視察及び学術交流に関する意見交換を行なうため同国を訪れ、予定どおりの旅程を終えて、9月8日帰国した。

今回の主な訪問先は、北京大学、中国教育部、中国科学院、清華大学、西北大学、中国医科大学、大連外国語学院等であり、各訪問先において関係者と意見交換を行なった。

## 国際交流会館の開館式

8月7日（土）、京都大学国際交流会館の開館式が、小川平二文部大臣をはじめ在京阪神外国公館の代表など学内外の関係者多数の出席を得て、同会館二階談話室において挙行された。

開館式は、午後1時に始まり、沢田敏男総長の式辞、小川平二文部大臣の祝辞に続いて、澤田徹事務局長から建設経過報告があり、午後1時25分終了した。

このあと、出席者の館内見学に引き続き、同談話室において披露パーティが催され、河野健二元本学国際交流委員会委員長（本学名誉教授）の発声による乾杯のあと、林田悠紀夫京都府知事、鯉坂二夫甲南女子大学長（本学名誉教授）のあいさつなどがあり、参加者一同なごやかに歓談した。



## ＜部局の動き＞

## 第5回京都サマー・インスティテュート 「原子核集団運動の微視的理論」

基礎物理学研究所は、7月12日から16日までの5日間、京都サマー・インスティテュート、1982<sup>年</sup>を開催した。これは、1978年以来毎年基礎物理学研究所が主催して行なっている小規模国際集会の第5回目にあたる。今回のテーマは、原子核物理学理論の中心的なテーマの一つである原子核集団運動の理論であった。原子核集団運動の量子力学的理解は1950年代以来の長年の課題であるが、最近、新たな実験的検証とあいまって、理論的研究が飛躍的に進み、この分野は新しい発展段階を迎えている。会議は世界の第一線の研究者による講義とセミナーによって構成され、それらの講演を中心に、終始活発な討論が展開された。参加者は、国内87名、国外29名（アジア、北米、ヨーロッパ、南米）、計116名に及んだ。主な講演者と演題は以下のとおりであった。

原子核の応答関数

G. F. Bertsch (米国 Michigan 州立大学)

原子核の場の理論

D. R. Bes (アルゼンチン 原子エネルギー

国際委員会)

時間に依存するハートリ・フック理論と

その拡張

K. Goeke (西ドイツ 原子核物理学研究所)  
集団ならびに独立粒子運動の微視的理論

—TDHF とその拡張— 栗山 惇 (九州大学)  
ボゾン—フェルミオン展開

E. R. Marshalek (米国 Notre Dame 大学)  
巨大共鳴の巾 吉田思郎 (東北大学)

(基礎物理学研究所)

## 工学部公開講座「自然のなかの工学」

工学部では、6月19日から7月10日までの毎土曜日の午後、工学部大会議室において公開講座を開催した。

テーマは「自然のなかの工学」である。この公開講座は一般市民を対象に、工学部及び関係研究所の教授・助教授が各自の研究分野における自然と工学とのかかわり合いをわかりやすく解説することを主眼としたものであり、約160名が受講した。講義題目、講師は次のとおりであった。

金属の話

高村 仁一

半導体と人間生活

松波 弘之

水と人間

中西浩一郎

病気を治す繊維, プラス

チック, ゴム

自然と建築

地震と災害—地震はなぜ怖い—

地球と惑星の電波現象

移りゆく航空機の姿

今西 幸男

加藤 邦男

土岐 憲三

木村 磐根

前田 弘

(工学部)

## 数学入門公開講座

数理解析研究所では、7月27日から8月5日までの間(7月31日, 8月1日を除く), 数理解析研究所4階大講演室において「数学入門公開講座」を開催した。

この公開講座は、社会人、中学・高校教員、学生等、ある程度数学の素養のある人を対象に、専門的題材をわかりやすく解説しようとするものであり、講座には約120人が受講した。講義題目、講師は次のとおりであった。

ひまわりの渦

ユークリッド「原論」を読む

ミクロの論理

転と団子

広中 平祐

一松 信

荒木不二洋

松浦 重武

(数理解析研究所)

## 公開講座「農業簿記・農業経営講習会」

農学部・農業簿記研究施設では、8月1日から6日までの間、農学部講義室において公開講座「第45回農業簿記・農業経営講習会」を開催した。

この講習会は、農業簿記とそれに基づく農業経営の分析・診断・計画に関する理論と実務の普及をねらいとしたものである。講習には農業改良普及員、高校教員、府県、各種団体職員、農家など全国各地から約130名が参加し、連日午前9時から午後5時まで受講した。講義科目、講師は次のとおりであった。

農家経済簿記および農家経済の分析・診断

菊地泰次 桂 利夫

農業経営複式簿記

阿部亮耳 頼 平

農業投資および資金の計画・管理・分析

頼 平 亀谷 量

地域農業および農業経営の分析・診断・計画

西村博行 吉田 忠 熊谷 宏

(農学部)

## 人文科学研究所夏期公開講座

人文科学研究所では恒例の夏期講座を8月1日から3日間、本館において開催したが、台風接近のため2日は中止し、1日ずつ繰り延べて4日に終了した。

この講座は、当研究所に日本部、東洋部、西洋部の3部ができてのち、毎年夏に開催されており、本年は33年目になる。今年の共通テーマは「人と作品」とし、古今東西にわたって各種の人物を選び、その人と著作物とをさまざまな観点から考察することを趣旨とした。演題、講師は次のとおりであった。

井原西鶴—俳諧師から作家への変貌—

久保由美

クルト・ネッターと『日本鉾山編』

吉田光邦

曹雪芹と『紅樓夢』

井波陵一

裴濯『嵩岳少林寺碑』

礪波 護

反キリストと中世の論理学

岩熊幸男

モンテスキュー『法の精神』

樋口謹一

(人文科学研究所)

## 公開講座「高等学校教育関係者のための現代数学展望」

この講座は、高校教員を主な対象として、理学部数学教室が、8月5日から11日まで日曜日を除く6日間行なったものである。

本年度4回目となったこの講座は、現在、研究者がどんな目的を持ってどんな理論を作りつつあるかの一斑を伝え、それが高校教育の現場に生かされ、また高校教員自身の研究活動につながることを希望して行なっている。

受講者は近畿・北陸を中心に約70名であった。自分の問題を持ち、それに対する講演者の考えを質す積極的な受講者も2、3に止まらなかった。またこの講座を高校教員以外にも開放してはという意見も聞かれた。講義題目と講師は次のとおりであった。

整数論の話—ハッセ・ミンコフ

スキーマの定理—

土方弘明

幾何学の話—多様体のユークリ

ッド空間への埋め込み—

足立正久

解析学の話—カオスの理論—

山口昌哉



力学系と乱流—非線型ダイナミ

カルシステム—

宇敷重広  
(理学部)

## 公開講座「木材の科学」

農学部林産工学教室と木材研究所とは合同して  
8月18日から3日間の公開講座を開催した。

この講座は、主として中学校技術・家庭科の教員を対象とし、実験室の雰囲気になかに木材研究の成果と展望との若干にふれてもらうことを意図したものであり、一部理科教員、および小学校、高等学校の教員をまじえ、21名の受講者を受け入れた。

講座のスケジュールは、第一日を合同講義にあって、第二、三日を各研究室における分属セミナーとした。それぞれのテーマおよび分担者は次のとおりであった。

合同講義 (8月18日)

木材の起源、構造と機能	島地 謙
肉眼による樹種の識別 (含実習)	林 昭三
木材の化学—成分とその利用—	岡本 一
木材の物理—材料としての性能—	佐道 健

分属セミナー (8月19日, 20日)

顕微鏡下の木材組織	木 材 生 物 部 門
林産バイオマス成分の	

化学的・微生物学的利用	リグニン化学部門
紙の調製とその性質	林 産 化 学 講 座
X線で見える出土木材	木材化学講座
木材の官能特性と物理的性質	木 材 工 学 講 座
木材の物理的性質と加工	木 材 物 理 部 門
高速度カメラによる木材	

切削現象の観察	林産機械学講座
木材の工学的再生	木 質 材 料 部 門
	(農学部, 木材研究所)

## 教養部構内発掘の梵鐘鑄造遺構

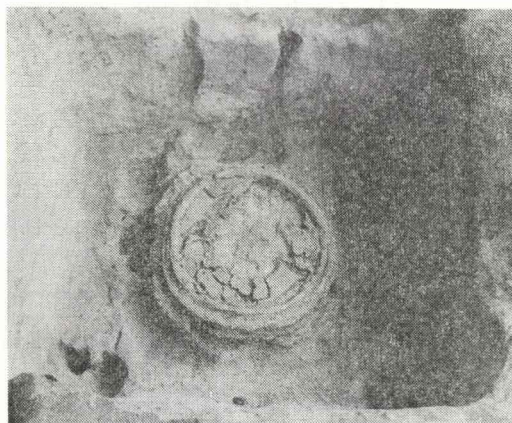
京都大学構内遺跡調査会 (会長 川上 貢工学部教授) は、昨年12月1日から教養部構内吉田食堂建設予定地 (面積1,716m<sup>2</sup>) の発掘調査を始め、本年5月8日に現地の調査を終了した。

調査の結果、道路と野壺、柵からなる、のどかな農村の景観を推定できる近世の遺構、溝を境に邸宅と墓地が広がる中世の遺構、古代の梵鐘鑄造遺構、5世紀末～6世紀初頭の方墳、弥生時代の人工水路などを検出した。このうち、梵鐘の鑄造遺構と鋳型などの出土遺物は特に注目される。梵

鐘は、一般の人々には、時を告げる鐘として親しまれているが、寺院の重要な構成要素をなすものであり、貴重な文化史的遺産でもある。また、その重量が数トンにもおよび、その製作技術が仏像などととともに、高度な鑄造技術を要したと想定できる。梵鐘の研究は、これまで形態、装飾、銘文を中心に進められてきたが、その製作技術については、まだまだ未知の部分が多い。教養部構内で発見された梵鐘鑄造遺構は、その鑄造技術を解明するための好資料を提供しているため、これを紹介し、古代の梵鐘鑄造技術やその変遷について考えてみたい。

## 梵鐘鑄造遺構の発見

教養部構内で発見された鑄造遺構は、東西に並ぶ3基の土坑からなる。このうち、2基の土坑 (SK245・SK257 (SKは土坑を示し、245は検出順に付された番号) 図1) は、ほぼ規模が等しく、SK257では、鋳型を設置するための定盤が残存し、その下に井桁状に丸太を組んでいた (写真参照)。SK245では、定盤が存在しなかったが、丸太材の痕跡と考えられる溝が残存し、ほぼ同じ構造とみてよい。また土坑の底面には、その一辺もしくは四隅に柱穴が存在した。もうひとつの土坑は、やや小型で浅く、溶解炉の基礎または、フイゴを設置するためのものであろう。



教養部構内で発見された梵鐘鑄造遺構 SK 257

土坑からは、スサ入りの粘土を焼きしめ、真土を塗りつけた梵鐘の鋳型や、鉋滓の付着した溶解炉の断片、土器が出土した。鋳型には、2本の凹線をもつ笠形の部分や、唐草や凹線を彫りこんだ上帯または下帯の部分、火焰の文様を付した龍頭の部分などがある(図2参照)。溶解炉は、円筒形で、フイゴから空気を供給するための送風口が造りつけられていたことも判明した。このほか、和鏡やその他の鋳型も出土した。

これらの遺構は出土した土器から、10世紀初頭ごろと考えられるが、これは、出土した鋳型から復原できる梵鐘の型式による年代観と矛盾しない。

#### 梵鐘製作技術の復原

次に、上記の検出遺構と出土遺物から、梵鐘製作技術を、他の調査例や現在の民俗例を参照しつつ、復原してみよう。

梵鐘を鋳造するにあたっては、鋳型を作り、鋳造を行なうための穴を掘ったうえ、銅を溶解する炉、空気を送るフイゴを設置しなければならない。

鋳型の製作——まず、鋳型は、梵鐘が回転体をなすため、現在回転軸を取りつけた木製の挽き型をまわして作り、龍頭、乳、撞座は別に造って外型にはめこむという方法をとっている。出土した外型をみると、その真土の表面に挽き目が明瞭に残り、木製の挽き型を用いたことがわかる。また龍頭の鋳型は、きめの細かい粘土を用いており、外型の粘土が付着していることから、別造りであることもわかる。他遺跡で出土した、乳や撞座の型も同様である。

鋳造坑——次に、鋳造を行なうための穴を掘り

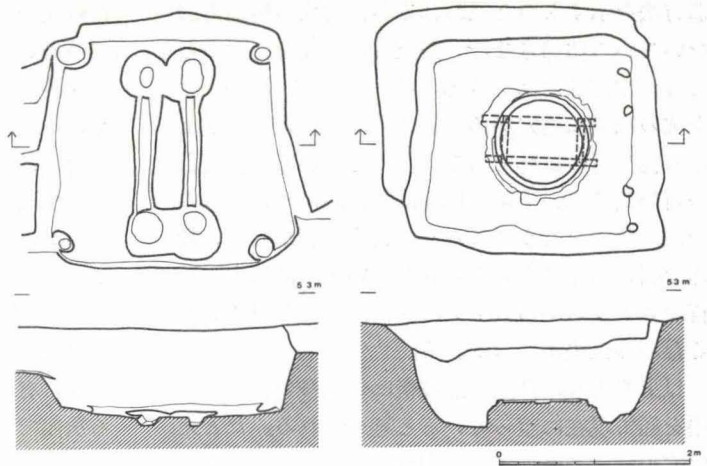


図1 梵鐘鋳造遺構 SK 245 (左)・SK 257 (右)

定盤を形成し、その上に内型・外型を設置するのであるが、SK257は、この鋳造を行なうための穴の最も良好な遺存例である。定盤の下で検出した井桁状に組んだ丸太は、鋳型を固定するための掛木と考えられる。現在の鋳造工房では、掛木は鉄製であるが、大正年間の兵庫県社町某寺院梵鐘鋳造、吉備津神社釜鋳造などの写真を参照すると、木製の掛木が用いられていたことが判明する。

鋳造・取り出し——鋳型を定盤に設置し、龍頭の上部の湯口から、溶銅を流しこむ情景は、図2を参照されたい。この図は、桑名の鋳工故中川裕次氏が描いたもので、おそらく明治以前の梵鐘鋳

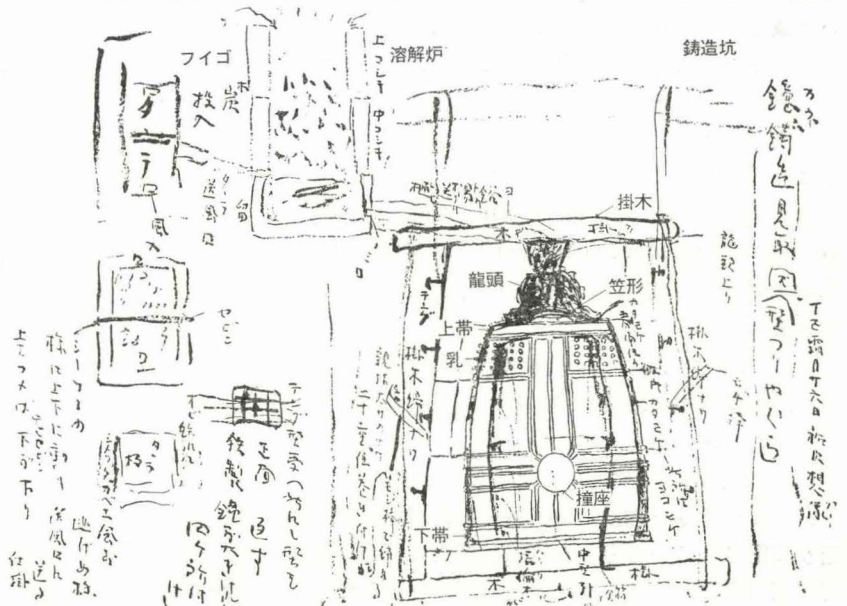


図2 桑名の鋳工故中川裕次氏の描いた梵鐘鋳造の図



造方法を示すものと思われるが、古代の鑄造方法をいろいろ彷彿させる。鑄上った梵鐘を、穴からとりだす方法には2種ある。SK257やSK245は土坑の底面に柱穴があり、これは、梵鐘をつり上げる構架材の痕跡であろう。一方、兵庫県多可郡多可寺例では、土坑の底面に柱穴がなく、土坑の一辺に斜面をもうけており、斜面を利用して、梵鐘を引きあげたと考えられる。いずれにせよ、数百キログラムから数トンにおよぶ梵鐘を引きあげるための工夫がしのばれる。

以上のような梵鐘鑄造技術は、幾多の技術的変遷を経て現在に至っていると考えられる。たとえば室町時代には、定盤の中央部に空気抜きと考えられる穴をもうけ、砂を入れるものが出現し、現

在の製法により近づいている。こうした技術的変遷の細かい検討と、梵鐘鑄造技術の歴史の変遷の追求が、今後の課題である。また出土銹滓の成分や、鑄造時の金属の温度など、自然科学の分野の分析も、進めてゆきたいと考える。なお、この鑄造遺構は、関係部局と話し合いの結果、その重要性にかんがみ、埋めもどしの上、永久に保存することが決定した。

今回の調査にあたっては、関係各位の協力と支援をいただき、また、工学部冶金学教室の方々からは、有益なる教示を得た。ここに、深く感謝する次第である。

(埋蔵文化財研究センター)

## 〈紹介〉

### 経済学部の「ビューヒャー文庫」

ドイツ歴史学派経済学の巨匠カール・ビューヒャー (Karl Bücher 1847-1930) の文庫11,446冊は、近代ドイツ社会史の研究者にとって貴重な宝庫である。文庫には、ルターの『商業と高利』(Martinus Luther, Von Kauffshandlung und wucher, Wittenberg 1524) (表紙写真参照)をはじめ、多数の希覯本が含まれているだけでなく、ビューヒャー自身が118のテーマに分類していた抜き刷り、パンフレット、新聞切り抜き、ビューヒャー宛て書簡等も付属していて、その分類のままスチール・ケースに収めて保存されている。文庫全体の内容については、経済学部が1970年に刊行した『カール・ビューヒャー文庫目録』(Katalog der Karl Bücher Bibliothek in der Wirtschaftswissenschaftlichen Fakultät der Universität Kyoto)によって詳細を知ることができる。

ここでは、ビューヒャー文庫がどのようないきさつから経済学部に所蔵されるに至ったかについて記しておきたいと思う。

1920年春頃にライプツィヒのフォック書店から、ビューヒャー教授の蔵書がその書庫を挙げて売りに出されているという情報が伝えられた。経済学部の教授たちはこれに絶大な関心を示したけれど、文庫の売価が当時の貨幣価値で4,000ポ

ンド(約4万円)もしたので辟易していたという(『大阪朝日新聞』大正10年1月24日付記事中の山本美越乃教授談、および『経済論叢』同年3月刊12巻3号所収の小川郷太郎「ビュッヒャー文庫」を参照)。

そこで経済学部は住友側に可能性を打診した。大正9年の庶務教務関係書類綴のなかに保存されていた文書によれば、当時の経済学部長田島錦治教授は大森研造講師を介して住友総本店の日高遼次氏に、ビューヒャー文庫を購入して京大へ寄贈することを依頼し、さらに学部長名義の電報の他に、河上 肇・神戸正雄両教授の連名による依頼電報も打たれている。

この電文の控えは以下のごとく記されていた。  
「サクジツ オオモリヲヘテ オネガヒイタセシ  
ブンコキフノケン ヨロシクタノム○ブユハア  
ハ ゴシヨウチノゴトク ドイツニテ五シノウチ  
ニイルベキ シドウノタイカニテ セカイーリユ  
ウノガクシヤナレバ ミギブンコヲ ニホンニウ  
ツスコトハ キワメテイウエキニテ ワレラノネ  
ツボウスルトコロ○ヨロシクキカノゴハイリヨ  
コウ カハカミ ハジメ○カムベ マサラ」

これに対し、おりかえし大正9年4月9日付で住友総本店支配人小倉正恒代理日高から大森宛てに送られた文書は、「……其旨重役ニ相談致候処右ハ折角之御来意ニ候得共彼是都含有之乍遺憾貴意ニ副ヒ兼候間不悪御諒承被成下度先ハ右御返事申上度如此御座候」というものであった。

その後、岩崎小彌太氏が三菱合資会社のためにビューヒャー文庫を買い取る意向をもっていることを伝え聞いて、小川郷太郎教授が三菱合資専務理事の青木菊雄氏や京大学生監の鈴木信太郎氏の斡旋を介して依頼したところ、岩崎氏は、独立の文庫として保存し、また三菱合資関係者に文庫閲覧の便宜を与えることを条件として、三菱合資会社社長岩崎小彌太の名義のもとに文庫を京大へ寄贈することを快諾された。

こうして、ビューヒャー文庫は経済学部所蔵するところとなった。文庫はビューヒャー教授の

自宅で荷造りされ、ただちに京大へ向けて送り出されたという。ビューヒャー教授がなお生存中にその全蔵書を手離すにいたったことは、第1次世界大戦後にドイツの知識人を襲った生活難にもとづくものであった。こうした痛ましい事情がもたらしたにせよ、ビューヒャー文庫が、教授の書庫を挙げての全蔵書という纏まりをもって日本へ移されたことは、日本における研究者にとっては一巨匠の学問的な息吹きや関心の拡がりに親しく接する機会を与える点からいっても、格別に貴重である。  
(経済学部)

# 計 報

神元五郎 (本学名誉教授・工学博士)

7月10日逝去、68歳。本学工学部卒。昭和26年本学工学部教授就任、同52年退官。専門は流体機械、実在気体力学、極超音速空気力学。

宮西光雄 (本学名誉教授・文学博士)

8月10日逝去、81歳。本学文学部卒。昭和24年本学教

養部教授就任、同39年退官。昭和50年勲三等旭日中綬章受章。専門は英文学。

池田總一郎 (本学名誉教授)

8月25日逝去、77歳。本学工学部卒。昭和35年本学教養部教授就任、同43年退官。昭和50年勲三等瑞宝章受章。専門は図学、建築学。

## 日 誌

(1982年6月1日～8月31日)

- |   |  |
|---|--|
| 6月1日 創立記念行事「音楽会」  | 7月2日 附属図書館商議会  |
| 4日 同和問題委員会  | 3日 理学部 玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会                                  |
| 5日 防災研究所・宇治川水理実験所創立30周年記念式  | 6日 安全委員会   |
| 8日 中華人民共和国中国医科大学訪日団団長 許国瑄教授外5名来学、総長および関係教官と懇談                         | 12日 基礎物理学研究所第5回京都サマー・インスティテュート (7月16日まで)                 |
| 11日 ウイルス研究所学術講演会  | 14日 国際交流委員会  |
| 14日 ケニア共和国高等教育省次官 Joseph T. Arap Leting 氏外3名来学、総長および関係教官と懇談ならびに学内施設見学 | 27日 学位授与式  |
| 15日 建築委員会   | 〃 数理解析研究所数学入門公開講座 (8月5日まで)                               |
| 16日 総長、大学院生協議会と会見   | 8月1日 人文科学研究所夏期公開講座 (8月4日まで)                              |
| 〃 国際交流委員会   | 〃 農学部附属農業簿記研究施設公開講座「農業簿記・農業経営講習会」 (8月6日まで)               |
| 18日 創立85周年記念式   | 5日 理学部数学教室公開講座「高等学校教育関係者のための現代数学展望」 (8月11日まで)            |
| 〃 名誉教授懇談会   | 7日 京都大学国際交流会館開館式   |
| 19日 工学部公開講座第1日 (6月26日、7月3日、7月10日)                                     | 18日 農学部林産工学教室、木材研究所公開講座「木材の科学」 (8月20日まで)                 |
| 21日 創立記念行事「学術講演会」   | 30日 総長、高等教育・研究機関の視察および学術交流に関する意見交換のため中華人民共和国を訪問 (9月8日まで) |
| 29日 評議会   |  |
| 〃 大学院審議会  |  |



